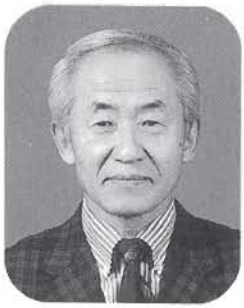
「大学は学問をする所」これを忘れないで欲しい

学校教育学部長　西山　啓



新入生諸君、入学おめでとう！　然し、この言葉に酔うのは、精々入学後二～三日にして欲しい。それ以上いい気になっている者は、別の意味でおめでたい人物と言うほかはない。

その理由は、大学とは「学問をする所」で、諸君はそれを目的として広島大学の門をくぐったからである。では学問とは何か？「一定の原理によって説明し体系化した知識と、理論的に構成された研究方法などの全体」「勉強すること」「知識を得るため学ぶこと」（三省堂・大辞林）を言う。つまり、高校時代と違って、「それは何故か」を自らの努力で、自由な立場から探究することのできるのが大学である。

学校教育学部

大学の自由な雰囲気とは、決してのんびりと暇を楽しむことではなく、様々な疑問や未知の分野をあらゆる角度・視点から思索し、解明することができることを言うのである。

これからの大学教育には、世界のどこにでも通用する高度の専門性と、広汎な知識、それを活用する創造性の涵養が求められている。殊に将来教師を目指す者にとっては、学問をすることの楽しさを身につけなくして、どうして児童・生徒に「学ぶこと」の楽しさを教えることができようか。

まずは最初が肝心である。ここに田山花袋の「今の中（うち）勉強して本をたんと読んでおくさ、今に勉強したくっても暇が無いような忙しい時代が来るからねえ」を餞（はなむけ）に贈ろう。

二十代のダッシュを！

学校教育学部学生　髙橋葉子

春の風が足取りを軽くさせ、キャンパスは、喜び一杯の新入生で華やいでいる。新入生の皆さん、学校教育学部への御入学おめでとう。皆さんは、大学とはどのような所であると考えているだろうか。昨日までの高校生活では、「勉強」をしてきたと思う。しかし、今日から始まる大学生活では、「学問」ができるのだ。私達は四年間、ここ学校教育学部で、人間と向き合った教育を学ぶ。児童生徒を目の前にして、彼らの内側にある「見えない学力」の存在に気付くことが出来るだろうか。一点を争う受験競争を潜り抜けてきた私たちが、児童生徒の数字に現れない能力を発見し、育んでやる事は、どれ程難しいことだろう。しかし、ここに教育の面白さもあると思う。

四年間の大学生活は、精神的独立のチャンスでもある。無限の可能性を秘めた大学生時代、今こそ二十代のダッシュに向けてスタートをきろう！